お米の栽培ごよみ

中干しと中干し以降の管理

中干しと水管理について

品種によって差はありますが、１株の茎数が１８～２０本確保できた頃から中干に入ります。できれば、溝切り機で作溝（管理溝）をすると、その後の用・排水管理がしやすくなります。なお作溝は５～１０列間隔で行います。

中干しは、湿田では軽いひびが入る程度に、砂質田では足が軽く沈む程度に行います。中干し後の水管理は間断かんがいを行い、根の健全化を図ります。

近年夏の猛暑がきびしくなっているため、梅雨明け以降は間断かんがいより短い期間で自然落水とかん水を繰り返す飽水管理を行ってください。飽水管理は一度に入れる水量はごく浅くで、水がなくなり足跡や溝に水が残る程度まで水が減れば、また水を入れるといった管理を繰り返し、夏の高温被害を軽減することができます。

出穂１週間前頃（穂ばらみ期）から穂揃い期にかけては、水を多く必要とします。多量の水を吸い上げて消費しますので、十分な水が供給できるように管理をしてください。

その後は飽水管理にし、登熟歩合を高めます。夜間気温の高い日が多いと登熟不良により減収や品質低下の可能性があります。夜間気温が高いと、もみの中でデンプンがうまく蓄積されず、白未熟粒（乳白粒や背白粒等）が発生しやすくなります。

飽水管理

これを繰り返し少ない水で湿った状態を保つ

穂肥

穂肥は水稲の生育状況を確認して施用時期や施用量を加減します。過剰な施用や、施用のタイミングが悪いと、倒伏や食味低下の原因になることがあります。穂肥は通常２回行い、１回目の穂肥はもみ数の確保を目的に、２回目の穂肥はもみの充実をよくするためにそれぞれ行います。

また、元肥一発肥料で栽培している場合でも、猛暑の場合、肥料が早く溶け出してしまい生育後半に肥料切れを起こすことがあります。状況によっては追肥を検討してください。

なお、施用量や施用時期については各支店生産課にご相談ください。

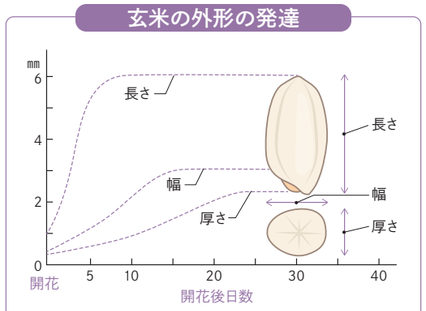
参考　穂肥施用の判断について

葉色	濃い	並	極端に薄い
施肥量	基準量より少なく もしくは見送る	基準どおり	基準どおり
１回目穂肥時期	コシヒカリ：幼穂長10～15mm、出穂18日前 キヌヒカリ：幼穂長２mm、出穂20～23日前		左記より ２～３日早める
２回目穂肥時期	１回目から８～10日後を目安に、遅れないように		

玄米の発達について

玄米の大きさが決まるまでは、出穂してから約４週間かかります。最初の１週間で開花・受粉し、次の１週間で玄米の長さが決まり、その次の１週間で玄米の幅が決まります。そして、最後の１週間で厚みが決まるため、早く落水した田んぼの米は最後の厚みが十分でなく、粒の薄い米になってしまいますので、最後までこまめな水管理を行いましょう。

玄米の外形の発達



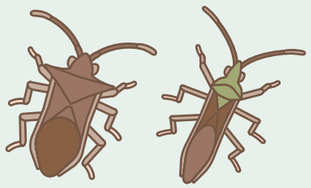
カメムシ類対策

一般的な斑点米を発生させるカメムシ類は、雑草で繁殖し夏期に水田へ侵入してきます。一般的なカメムシ類はイネ科雑草の穂を好んでエサにするため、水田周辺（畦畔）の雑草の差で発生量が変わってきます。カメムシ類対策として、まずは水田周辺の草刈りによってカメムシ類の発生密度を抑えてください。

イネ科の雑草は、一度刈り払うとおよそ３週間で同じくらいの大きさに戻ります。そのため、水稲の出穂３週間前と出穂直前の２回の草刈りをすると水田周辺の雑草が長期間なくなり、カメムシ類の密度を効果的に抑えることができます。なお、作業の都合で１回ですませる場合は、水稲の出穂２週間前を目安に草刈りを行ってください。

水稲を吸害するカメムシ類は体長５～６mmのアカスジカスミカメや体長９～11mmのホソハリカメムシ、体長15～17mmのクモヘリカメムシなどいくつかの種類のカメムシが知られていますが、2024年度はこれらのカメムシ類に加えてイネカメムシが大きな問題となりました。

これまでのカメムシ類では斑点米を発生させて品質低下型の被害が出るのに対し、このイネカメムシは出穂直後のもみを加害することで不稔もみを発生させることが多く減収型の被害を起こしました。

イネカメムシは出穂直後の防除が有効という研究報告もあり、従来の薬剤防除のタイミングではイネカメムシの加害時期に間に合わないため、昨年発生の確認されている地域では防除時期の変更も検討してください。

仕上げ防除の薬剤は、農薬の飛散を考慮して、「粒剤」や「豆つぶ剤」の使用をお薦めしています。「粒剤」や「豆つぶ剤」は有効成分を作物に吸収させることで効果が出るため、散布時期が特に重要になります。一般的なカメムシ類を狙って防除を行う場合は出穂期から穂揃い期に、イネカメムシを狙って防除を行うなら出穂直後の散布を目安にしてください。